



The MPC training

アメリカ研修レポート

2015.3.10 tue - 3.14 sat The United States Seattle.

Training Review

MPCアメリカ研修の目的

10年後、薬剤師は地域を支える医療チームの中でどのような役割を果たしているのだろうか。アメリカの変化の歴史から、「10年後の薬局薬剤師の役割を考える」ことをMPCアメリカ研修の目的としています。

日本においては、平成28年4月の診療報酬改定において、「かかりつけ薬剤師」が大きく標榜され、従前からの「地域包括ケア」「健康サポート薬局」と合わせて、薬局のあるべき姿が示されました。この背景には、著しい少子高齢化に伴い、社会保障に向けられる財源が逼迫し、その中で「医療介護を維持継続するか」という大きなテーマがあります。

アメリカにおいては、1980年以降、高コスト・難アクセスの医療機関を補完する形で薬剤師の職能拡大が行われてきました。インフルエンザ他十数種類の予防接種、疾病の早期発見と投薬後管理(リフィル)のためのフィジカルアセスメ

ントという形で、社会に貢献する薬剤師像が確立されてきました。また、コストを引き下げ薬剤師をより身近なものにする目的で、「薬剤師でなくてもできる業務」に関しては、積極的にテクニシャン等への業務委譲が行われてきました。

ワシントン州立大学DON DOWNING教授は、ワシントン州において有志薬剤師グループとワシントン大学を中心に、アメリカの薬剤師活動の革新を行われた方であり、今では教授として、薬剤師教育のみならず、医師会や政治・行政との折衝、社会への働きかけなど幅広く活躍されておられます。

薬剤師会、大学、薬局企業が協力し、いかにして薬剤師のあり方を変えたのか?その活動とマインドを学ぶ機会として本研修を企画いたしました。

■参加大学/就実大学・崇城大学・福岡大学・福山大学・安田女子

■2015年 MPC会アメリカ研修 日程(シアトル)

1日/2015年3月10日(火)東京(成田)発 シアトル着

2日/2015年3月11日(水)シアトル滞在(~4日まで)

4日/2015年3月13日(金)ホテル発 シアトル発

5日/2015年3月14日(土)東京(成田)着 東京(成田)発 福岡着

【プログラム】

- ①セミナー アメリカの医療・保険制度
薬局ドラッグストアの進化
薬剤師の役割の変化(予防、治療、連携)
メールオーダーセンター
- ②ワシントン州立大学DON教授 講義&ディスカッション
- ③ワシントン州立大学病院見学
- ④ドラッグストア・薬局視察
- ⑤Pharmacy with no medicine(薬を売らない薬局モデル)
- ⑥学生ディスカッション



Group Discussion

Don Downing 教授の指導によるグループディスカッション

テーマ

薬剤師業務をより
有意義なものにするための法的、
制度的課題

- ①薬局の利益を改善するために法律や制度に何か一つ期待するとしたら、何を望みますか?
- ②薬剤師の医療業務を改善するために法律や制度に何か一つ期待するとしたら、何を望みますか?
- ③患者の健康改善のために法律や制度に何か一つ期待するとしたら、何を望みますか?
- ④法律や制度の手続きに、どのような形で関与したことがありますか?
- ⑤日本の薬局において、最高の味方/協力者は誰ですか?

[コーディネーターより抜粋]

上記の議論をグループで行い、発表しつつ、Downing教授がリード。何を解決すべきかの気づきを導く展開。

アメリカのファーマシースクールでは(ビジネススクール等、他の専門大学院でも同様)、このような議論がよく行われる。日本の大学教育が講義中心で、学生は「学ぶ」ことは上達するが、「考える」「伝える」ことの訓練が足りないと言われるのは対照的である。

今回は法律・制度をテーマとしていたが、それはおそらく、



日本の薬剤師が今後大きな変革期を迎えるとお伝えしておいたので、アメリカにおいてもそうした時期には、薬剤師は単に知識や技量を習得するだけでなく、社会に働きかけ、法律や制度の改革を求めてきた(教授はその中心人物であった)ことからこうしたテーマを選定いただいたのだと思う。

実は、私が経験した過去数回のDOWNING教授の授業では、実に広範な議論が行われてきた。今回の研修の冒頭(福岡空港)で提示した、「アメリカでは、薬剤師の平均年収が10万ドルと言われる。その原資の大きい部分は、高いことで有名な医療保険である。国民からバッシングを受けないためにも、薬剤師が何故それだけの収入を得るにふさわしいのか、国民が納得できる論理構築をせよ。(Don Downing教授:Pharmacy School 2年次の授業より)」もその一つであった。

Don Downing氏 州立ワシントン大学薬学部教授

教鞭をとる傍ら「コミュニティーファーマシー研修プログラム」の運営にも携わる。「PuyallupTribalHealthAuthorityClinic」の設立から薬局長として勤務、またワシントン州内のコミュニティー薬局のオーナーとしての経験もある。一方で、NIK(国立衛生研究所)、FDA(食品医薬品局)、HRSA(保健資源事務局)の調査研究官として全米保健医療分野で大きく貢献している。

こうした訓練は、薬剤師の地位向上に際して必要であることは言うまでもないが、医師や患者との会話においても必須である。私自身、ビジネススクールの授業で、「コミュニケーションやプレゼンテーションの成功とは何か、定義せよ」と言われたことがある。日本の学生にこの質問をすると、「考えたおりに出来ること」「気持ちや思いが伝わること」といった回答が多く寄せられる。これは、アメリカではほぼ零点である。私が習った定義は、「自分の意図する行動を、相手が進んで起こすこと」であった。尺度は自分の言動ではなく、相手の行動という結果なのだ。服薬指導も一種のコミュニケーションであるが、その成功は、決して相手に伝えたことではない。患者が、服薬の意図を理解し、薬剤師と共に病気に立ち向かう意思を持って、確実に服薬することであるはずだ。私たちが学ぶべきは、「何をすべきか」に加えて、「どのようにすべきか」でもあることを痛感する次第である。



Impressions

感想

福岡大学5年 廣田道子

日本とは異なる保険制度のなかで行われているアメリカの医療を、薬剤師の業務という側面から学ぶことができました。また、そのことによって日本の薬剤師のあり方が普遍的なものではないということを知り、これからのドラッグストアあるいは調剤薬局の役割について考えることができました。

福岡大学5年 後藤将太郎

実績を作ることができれば、日本においても薬剤師の職能拡大は期待できるのではないかと感じた。アメリカの薬剤師は高い専門性が要求されるからこそ、責任感、社会的な存在価値、医師や患者からの信頼性は必然的に向上し、高い意識を持って活躍ができていているということを感じた。

福岡大学薬学部 福田まみ

視察や講義を通して日本の薬剤師のいいところも発見することができた。見るだけでなく、発表という場を頂けたことで考えを話し合いまとめる作業、そして、最終的に、どうすれば日本に活かせるか、相手を動かすにはどうすればいいかという、深いところまで考えを持っていくことができた。大学入学をゴールにするのではなく大学生になった後こそ薬剤師としてどうありたいか、患者さんにとってどんな薬剤師が必要とされているのかを考える薬学部生を増やすきっかけになる研修だと感じた。



MPCとは (Medical Pharmacies for Community)

地域医療に貢献する薬局を実現する会として、2010年に発足大賀薬局、サンキュドラッグ、新生堂薬局、下川薬局、ミズ5企業が参加。最も身近な医療提供者としての地域密着型薬局の品質の向上を追求し、実現することを目的に、共同で地域医療に貢献する薬局モデルの研究、実現のための共同事業、薬剤師の教育システムの構築などに取り組んでいる。

MPCアメリカ研修とは

「今後の薬局薬剤師の役割をアメリカに学ぶ」ことを目的に、学生と大学教員、現場の薬剤師が学び合う場として2015年より開催。大学病院の見学、ドラッグストア、専門薬局を訪問しつつ、同世代の学生同士でディスカッションして、20年後の薬剤師像を想像し共有するためのプログラムです。

